



▲少年時代の操さん(左)と友人。昭和5年頃。

センチメンタルな男 横山操

●すべてのはじまり《渡船場》

操さんは大正9年1月25日、旧吉田町に生まれ、横山家の養子になります。幼いころから絵を描くことが好きな少年でした。卒業後、画家を志し14歳で東京。川端画学校日本画部の夜間部で絵画の基礎を学びました。昭和15年9月、第12回青龍展に《渡船場》を初出品し、入選します。青龍展を主宰する川端龍子(りゅうこ)は、この絵を見て「これが君と青龍社をつなぐ渡し舟になるといいね」と声をかけたそうです。挿絵画家から日本画の大家になった龍子を目撃にしていた操さんはその言葉に大変感動し、日本画への想いを新たにしますが、12月に軍隊に召集され、本格的に絵を描き始めることはできませんでした。しかし、従軍・捕虜時代も絵を描き続け、復員後はすぐに青龍社に入会。渡船場の絵は確かに二人をつなぎ、操さんは龍子のもとでいくつもの傑作を生み出します。

●人間のふたへ

シベリアから復員した操さんは、吉田町に帰郷するも、2カ月で再び東京。東京を拠点に活動します。町の人たちと直接的に関わることは少なかったようですが、画家として成功した後、新潟市へは頻繁に訪れていたということ。操さんは新潟からタクシーで吉田まで出向き、スケッチをしていました。晩年に至るまで、新潟県や吉田町の風景を描いた作品を多く残しています。吉田の街があり、少し行くとすぐに草原があり、そこにハザル



▲操さんが過ごした吉田の商店街(撮影年不明)。

が立ち並び、西川が流れ、弥彦山や角田山に日が沈んでいく風景。それは操さんの心に原風景として刻まれ、ひとつのイメージとして作品中に繰り返し登場します。尋常高等小学校時代の恩師への手紙には、画家への道を歩み始めたばかりの操さんの心境が綴られていきます。差出人の文言は「センチメンタルな男 横山操」。彼の心の中には常に吉田町があり、遠く東京の地で、その郷愁は創作意欲の大きな原動力となりました。



▲『吉田の学校を描こう。そしてヤヒコ(山も)限らない嬉しさで一ツパイです。』

初期作品群発見から10年 修復と恩師について聞く

平成21年、操さんが10代後半から20歳にかけて制作したスケッチ29点、下絵5点、本画5点が燕市へ寄贈されました。その修復をつとめた、操さんの教え子であり、自身も多摩美術大学教授である、日本画家の中野嘉之さんにお話を伺いました。

なかの よしゆき
中野 嘉之さん

(日本画家、多摩美術大学名誉教授)



●しんみりしながら修復しました
――操さんの初期の作品をご覧になったときはどう思われましたか？
とても驚きました。戦争で全て焼失したと思っていたので。修復した絵は5点。全部、絵の具が割れて横に線が入ってしまっていました。
――修復の様子を教えてください。
先生の紙に近い紙で新しく裏打ちをして、それから彩色をしました。先生の塗った色を再現するために、絵の具を別の紙で色合わせをし、割れた部分をコッコッ修正していきました。

破損箇所を先生が即席で直したところもあり、それは取り除かずそのまま修復しました。描いていた時、相当急いでいたのかもしれないね。修復作業は私一人で行ったので、全部直すのに1年ほどかかりました。しんみりと色んな事を思い出しながら直していきながら、修復に携われてよかったです。

●実感をする、体感をする、感じる

――操さんの人柄は？

優しく、面倒見の良い人でした。しよっちゆう(学生)を引き連れて飲みに行っていましたね。でも私たちがヘトヘトになって寝ても、先生はアトリで絵を描いていました。いつ寝ていたんだろう(笑)

――凄い人だったんですね。

でもちょっと淋(さび)げな感じもありました。朗らかに飲んでいるのに、あるときすっと引いて物思いにふけるというか。学生の面倒をみたり話を聞いたりしながら、ふと自分

のことを思い返したりしたのかもかもしれません。

――操さんからはどのような指導を受けられましたか？

絵の精神性、「何が描きたいのか」ということですね。「物を見るときには自分で実感をする、体感をする、感じる。感激しないと物事を自分で取り込むことはできない」というようなことをおっしゃっていました。「スケッチブックを手離さず、いつも瞬間瞬間、いいなと思ったときにそれをすぐ写し取る訓練をしろ」と。その教えを今も守っています。

――今も、ですか。

先生とお会いしてお別れするまで10年くらいなんです。が、とても濃厚な時間でした。そのときの影響が今も残っています。「ここまで描いてこられたのは、先生の教えと

想いが心に染み込んでいるからですね。

先生がそうやって私たちの世を育ててくれた恩返しとして、私も若い世代を育てようと頑張っています。

――平成23年、操さんの故郷である燕市で講演をしていただきました。

その時、燕市を回って、弥彦山に登りました。ちょうど田んぼに水が張って、まるで湖みたいでした。これが全部雪になったとき雪原が生まれるんだと。先生の初期の頃の水墨画ですね、そういう絵を思い出しながら、眺めていました。

燕という場所を先生の作品を通して見るので、なんとも不思議な感覚でした。初めて見るのに懐かしい。絵で覚えているんですよ。いい町だと思いつつ見えていました。



▲修復時の資料(写真上《隅田河岸》、写真下《貨車》)。作品は絵の具が割れていたほか、穴が空いていたものも。